陸上競技における競技特性と性格特性およびパフォーマンスに関する検討
A study of relationship between characteristic,personality and performance in Track&Field.

1K07A179-8　　原田 あゆみ
指導教員　主査 山崎勝男先生　　副査 礒繁雄 先生

【目的】

陸上競技には多数の種目が存在し，種目ごとにまとまって練習・生活している場合が多い．このような生活の中で，選手たちは競技技術だけでなく日常生活における様々な規律，生活リズムなども学ぶ．陸上の競技は長距離，短距離だけでなく，投擲・跳躍など様々あり，種目ごとで選手たちに求められる協調性などの性格特性，集中力および活動性が異なると考えられる．

そこで本研究では，4 種類の陸上競技種目を取り上げ，それぞれの選手の性格特性とパフォーマンスとの関連について検討することとした．

【方法】

早稲田大学競走部９６人及び日本大学陸上競技部投擲ブロック４人を対象とし，性格特性の検討には矢田部ギルフォード性格検査(以下，ＹＧ性格検査)，NEO－FFI を用いた．さらに，各ブロック１１名ずつに内田クレペリン検査を実施し，性格特性とパフォーマンスとの関連を短距離・跳躍・投擲・長距離の各ブロック間で検討した．これに加え，質問紙の回収状況や生活リズムについても種目ごとに比較調査した．

【結果】

提出物の結果

短距離ブロックは期限内提出者が５０％を下回っているのに対し，投擲ブロック・長距離ブロックは８０％を超える提出率であった．未提出者も短距離ブロックが一番多かった(３２人中１０人)．

学年ごとの提出物提出率は，１年生から４年生になるにつれて，期限内提出の割合が減っていた．これに対して期限外提出の割合は４年生になるにつれて増加していた．

性格特性と内田クレペリン検査の相関関係

ＹＧ性格検査と NEO-FFI の各項目と内田クレペリン検査の初頭努力率・動揺率・休憩効果率の相関をブロックごとに検討した．

短距離ブロックでは「動揺率(さき)」と「抑うつ性」・「劣等感」・「非協調的」の項目において有意な正の相関関係，「動揺率(さき)」と「活動的」の項目において有意な負の相関関係がみられた．「動揺率(あと)」と「活動的」の項目においても負の相関関係がみられた．「休憩効果率」と「社会的外向」の項目においては正の相関関係がみられた．

跳躍ブロックは内田クレペリン検査の「初頭努力(あと)」と「気分の変化」・「非協調的」の項目において負の相関関係がみられた．「動揺率(あと)」と「抑うつ性」・「気分の変化」・「神経質」・「主観的」・「非協調的」の項目において負の相関関係がみられた．

投擲ブロックは「初頭努力(さき)」と「抑うつ性」・「気分の変化」・「劣等感」・「非協調的」・「攻撃的」の項目において正の相関関係がみられた．「初頭努力(さき)」と「神経症傾向」の項目において正の相関関係，「初頭努力(さき)」と「誠実性」の項目において負の相関関係がみられた．

長距離ブロックは「初頭努力(さき)」と「抑うつ性」・「劣等感」・「神経質」との項目に負の相関関係，「初頭努力(さき)」と「活動的」・「支配性」・「社会的外向」との項目において正の相関関係がみられた．「動揺率(あと)」と「抑うつ性」の項目において負の相関関係がみられた．

【考察】

本研究結果より，提出物についてこれまで短距離ブロックの特徴として推測されてきた，学年が上になるほど提出率が悪くなることを本研究では実際のデータで示すことができた．

また，ブロックごとに，性格特性(ＹＧ性格検査,NEO-FFI)とクレペリン作業(作業量，初頭効果率，休憩率，動揺率)について検討した結果，短距離ブロックと跳躍ブロックは気分の変化が低い場合，投擲ブロックは調和性が高い場合，そして長距離ブロックは神経症傾向が低く活発であるなど心身が健康であることがそれぞれパフォーマンスの向上に関連して可能性が示唆できる．

本研究結果より，種目ごとに私生活での規律，生活リズム，よりよいパフォーマンス発揮ができる状態が異なることが分かった。さらに，種目間で特徴となる性格特性は異なるものの，どの種目においても，心身が活発で健康な状態・気分の変化が少ない状態が最もよいパフォーマンス発揮が可能となる状態であることが示された．